

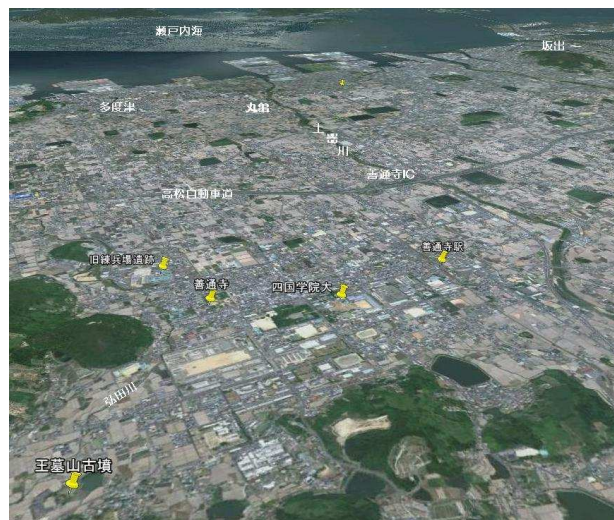
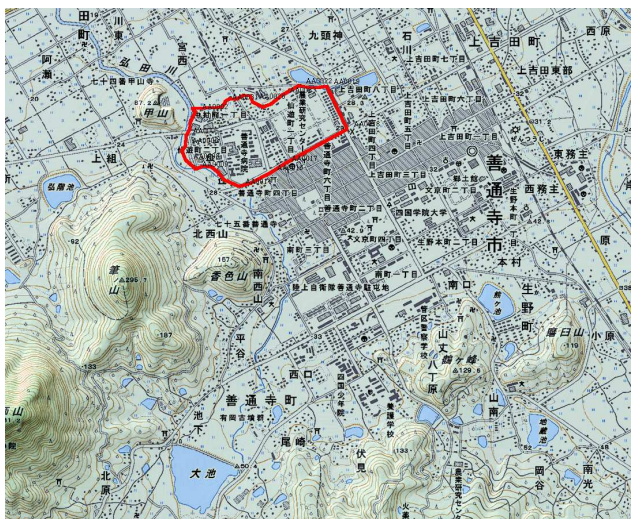
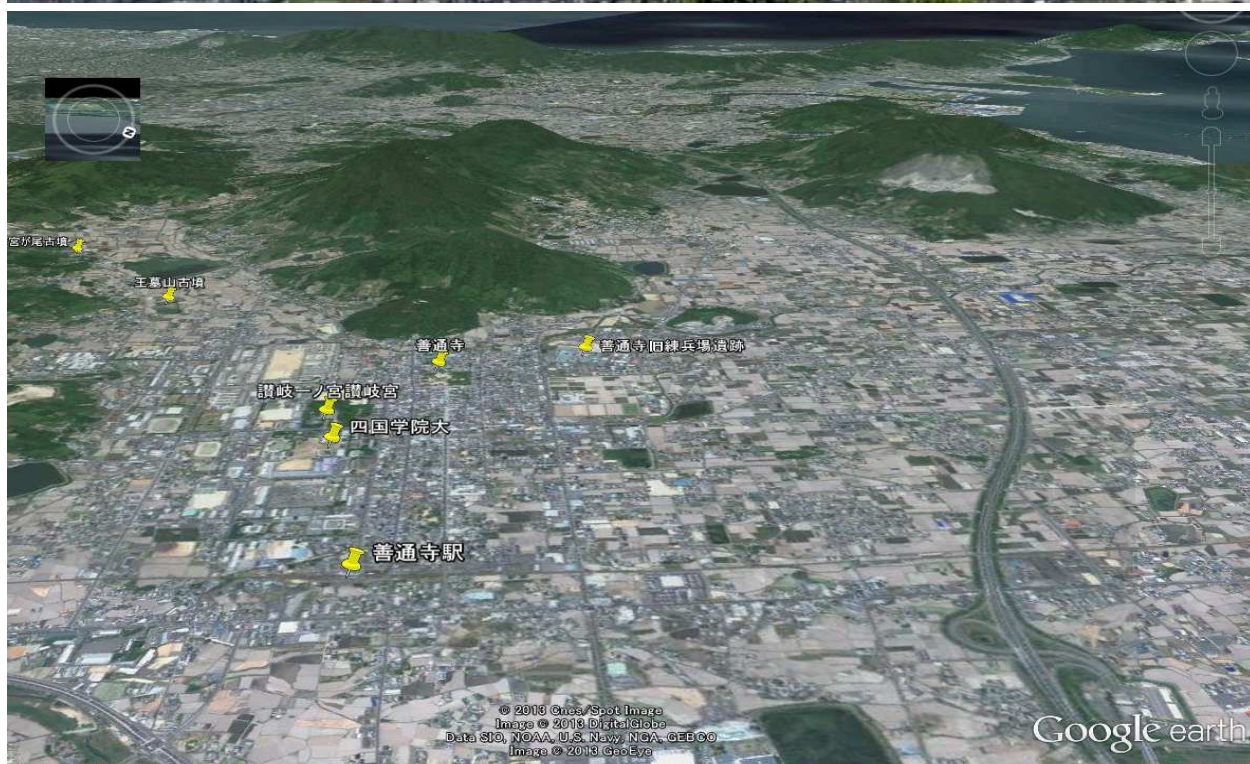
日本各地の人が交流した大都市集落 善通寺市「旧練兵場遺跡」を訪ねる

日本各地に国が起る弥生時代の終末期。 3世紀卑弥呼の時代、邪馬台国論争が続く中、邪馬台国の所在地と提案された九州吉野ヶ里遺跡や奈良纏向遺跡以外にも、国の規模を有する大きな都市機能を有する大規模中心集落が、日本各地に幾つが存在する。

この3世紀は実用鉄器が本格的に普及してゆく時代でもあり、鉄の流通には、この地域拠点集落が重要な関係を持っているに違いなく、あまり意識していなかったこの弥生の地方拠点集落の地を訪ねて、和鉄の道を眺めたいと。

昨年12月 近江 琵琶湖湖岸 野洲川の河口近く、大陸-琵琶湖から東国・大和を結ぶ入口に当たる弥生後期の拠点集落で楼閣があったという栗東/守山の境界部に存在する「伊勢遺跡」を訪ねました。

今回は 四国讃岐平野の北西部善通寺市にある讃岐の拠点大集落「旧練兵場遺跡」を2月27日松山へ行った帰りに訪ねました。

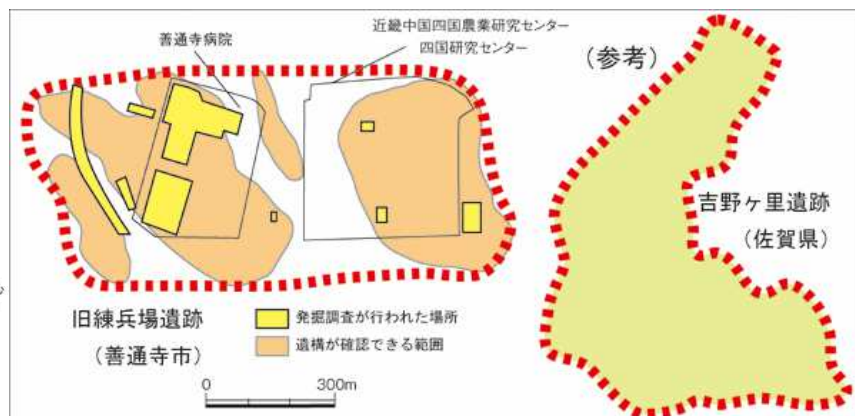
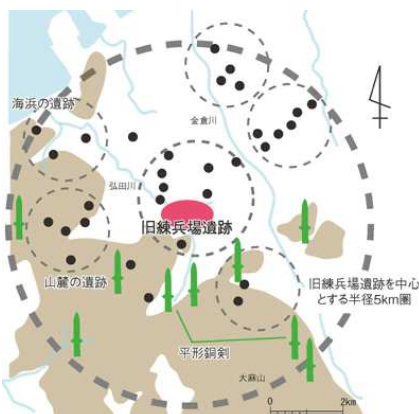


讃岐平野が広がる香川県の北西部位置し、空海生誕の地といわれる善通寺市。
地形は平坦ですが、南に金比羅宮がある琴平山に続く大麻山、西に五岳の山々を背に山裾からなだらかな傾斜で平地が讃岐平野に続いており、このあたりまで、瀬戸内の海が広がり、かつては屏風ヶ浦と呼ばれていた、四国八十八箇所善通寺は屏風浦五岳山誕生院と称し、今も参詣の人が絶えない。

こ善通寺のすぐ北東側に広がる平地部は縄文時代から中世にかけて絶えず受け継がれてきた大集落で、特に弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、大いに栄え、日本各地の人々が交流した讃岐国の中心の大都市集落で、大集落跡を示す数多くの遺構と共に数々の周辺諸国の物品・土器などの遺物が出土している。

かつて、この地が練兵場であったことから、「弥生末期讃岐国の中心集落 旧練兵場遺跡」と名づけられた。

また、遺跡全体が発掘調査されたわけではないが、遺跡野大さはほぼ吉野ヶ里遺跡にも匹敵し、ここに卑弥呼の邪馬台国があったと提案する研究者もいる。



弥生末期讃岐国の大都市集落 旧練兵場遺跡の大きさ概略

<http://www.city.zentsuji.kagawa.jp/digi-m/culture/detail/080/index.html> より

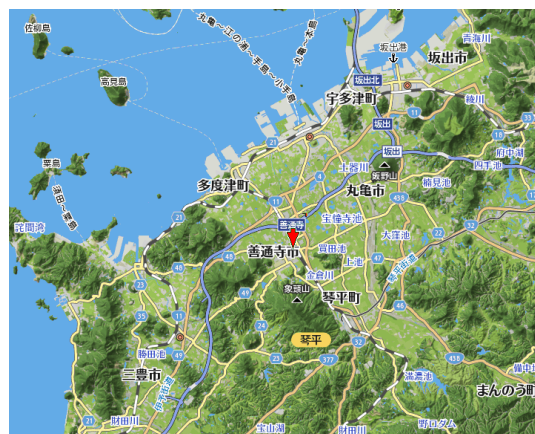
善通寺市

善通寺市は、香川県 讃岐平野西北部を南北に瀬戸内海へ流れ下る土器川が形成した緩傾斜の扇状地に位置し、南を琴平町、まんのう町、北を丸亀市、多度津町、西を三豊市に隣接する中讃地域の中核都市。

市街地は市のほぼ中央部を総本山善通寺からの拡がりをもって形成されており、中心部には自衛隊、独立行政法人国立病院機構善通寺病院、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構四国研究センター、大学などの公共機関等が多く立地し、独特な市街地を構成している。

市域は南に大麻山、西に五岳の山々を控え、東と北には平地が開けて讃岐平野に続く、東西8.9km、南北7.96kmの平坦な地形で、市内を東西に国道11号、南北に国道319号が走って、市の北部で交差。また、国

道319号と平行してJR土讃線が走り、北部には、四国横断自動車道が国道11号と平行するように東西に走っており、同自動車



道の善通寺インターチェンジは、本市はもとより中讃エリアの陸上交通の拠点機能の一翼を担っている。

善通寺市ホームページより、<http://www.city.zentsuji.kagawa.jp/index.php>

私にとって、善通寺市はかつて娘が大学生活を送った地で、何度か訪れたことがあり、市街地の背後をなだらかな山が取り囲む善通寺の門前町。そして自衛隊が駐屯するゆったりと落ち着いた町の印象が強い。

旧練兵場遺跡の名も知っていましたが、「国立病院の建っている場所」と聞いて、「あそこか・・・」と思った程度で、「ここが古代 讃岐の中心地」の思いはなく、「そういえば 讃岐 一の宮 讃岐宮もあったなあ・・・」と。

讃岐うどんブームが巻き起こるとは露知らずでしたが、「讃岐うどんのおいしいところ」ゆであがったうどんにそのまま醤油をぶっかけて食べる方法に眼を白黒しました。

今回は 旧練兵場遺跡に行って、後は 讃岐うどんを食べ歩きながら、ゆっくり街歩きを楽しもうと。

1. 「善通寺市旧練兵場遺跡」概要 吉野ヶ里遺跡に匹敵するほどの大集落 四国にあった「クニ」の解明が進む

「発掘された日本列島 2012 新発見考古速報 - 弥生 香川県善通寺市 旧練兵場遺跡」ほかより抜粋整理



旧練兵場遺跡群は善通寺市仙遊町に所在し、現在の国立病院機

構善通寺病院・農業試験場を中心に広がる東西約1km、

南北約0.5kmの縄文時代後期から中世にかけての大集落遺跡で、戦後のさまざまな土木工事の際に土器などが多数採取され、遺跡があることが想定されていた。

1980年代から断続的に発掘調査が行われ、500棟以上の竪穴式住居跡や50棟以上の掘立柱建物跡、土器棺、鎌倉時代の条里制の基準線となる溝などの遺構や、銅鐸、青銅製のやじり、大量の玉類、丹塗土器や絵画土器など、多種多様な遺物が見つかった。

特に弥生時代中期後半（約2100年前）から古墳時代前期初頭（約1750年前）にかけて栄えた集落遺跡で、おびただしい数の竪穴建物や掘立柱建物、溝などの遺構が検出され、集落の範囲は吉野ヶ里遺跡にも匹敵する45万平方メートル以上に達することが判明。

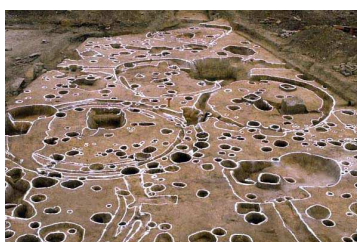
また、おびただしく重なり合った住居跡の様相や、土器をはじめとする遺物などから他地域との交流、金属器の生産など、当時の暮らしぶりが明らかにになりつつあり、以前は旧練兵場遺跡、善通寺西遺跡、仙遊遺跡、彼ノ宗遺跡、中村廃寺など別個の遺跡名と呼ばれていましたが、現在では同一の遺跡と認識されています。



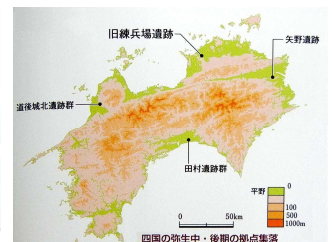
吉野ヶ里遺跡に匹敵する弥生の大集落遺跡

善通寺市「旧練兵場遺跡」

- ◎ 弥生時代中期～古墳時代に存続した集落
- ◎ 銅鐸、銅鍬、銅鏡が出土
- ◎ 他地域の集団との交流



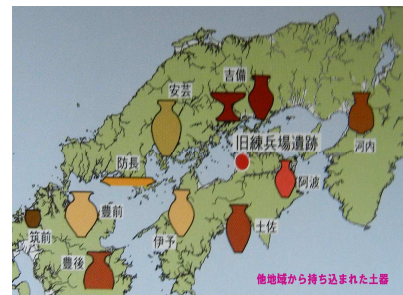
ササキイト製の打製石包丁
長さ12.6センチ。





ヒスイ製勾玉、ガラス製小玉など 写真右側の青いのがガラス製小玉、中央奥がヒスイ製勾玉です。また、碧玉の破片が出土しており、管玉と考えられます。小玉の直径、0.35～0.55センチ。

銅鏡片 後の時代の遺構などから、内行花文鏡などの後漢製の舶載鏡片と日本列島内で製作された仿製鏡片（写真の一番上）が出土しています。朝鮮半島や中国大陆を含めた東アジア世界とも関係があったことがうかがえます。下端の破片の長辺2.0センチ。

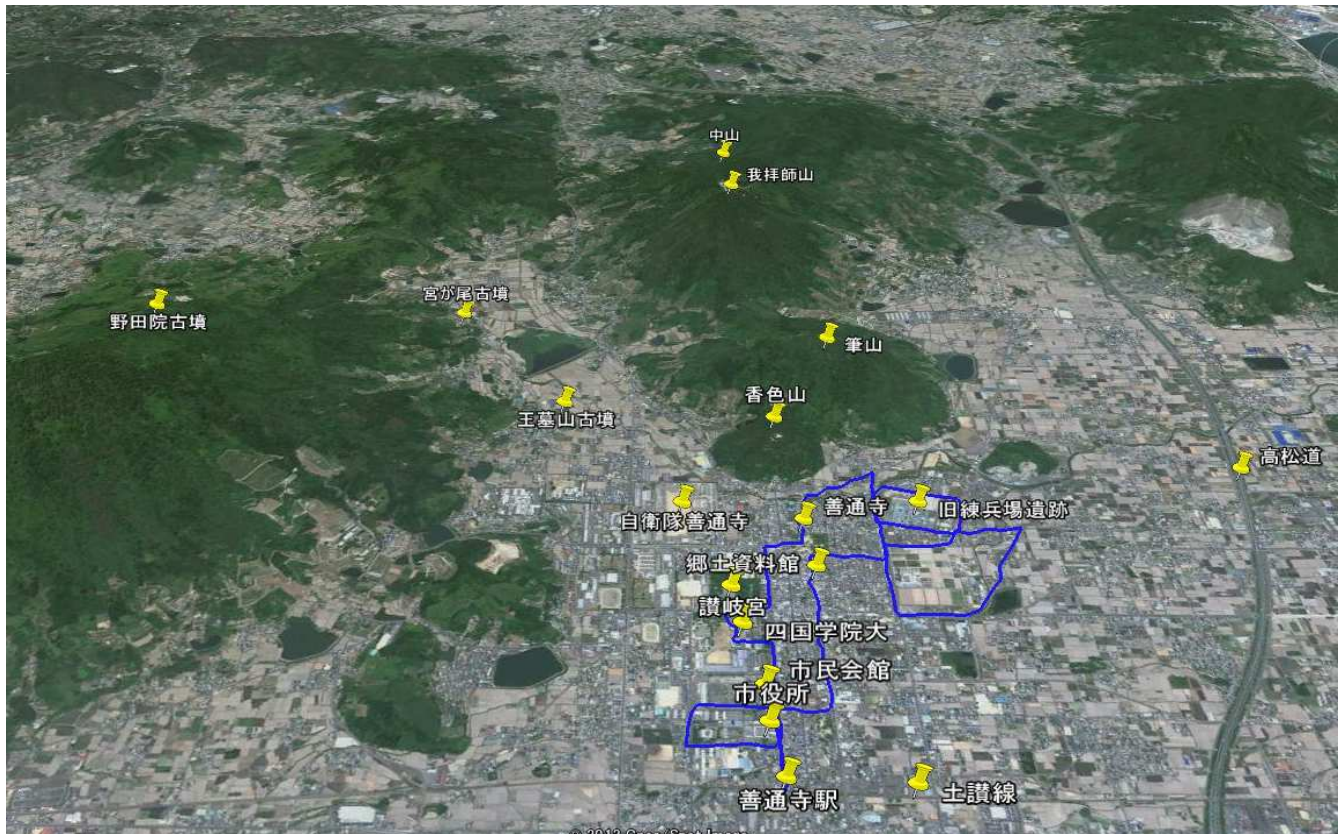


【整理・参考資料】



1. 「発掘された日本列島 2012 新発見考古速報 - 弥生 香川県善通寺市 旧練兵場遺跡」
2. 香川県埋蔵文化財センター考古学講座 12「瀬戸内をゆきかう人々」2011. 7. より
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/kankobutsu/koukogakukouza12.pdf>
3. 香川県埋蔵文化財センター 香川の弥生時代研究最前線—旧練兵場遺跡の調査—
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/inishiekaranomessage.html>
4. インターネット検索より 香川県埋蔵文化財センター [PDF] 旧 練兵場遺跡
www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/nenpo/nenpo08/nenpo08_04.pdf
5. 香川県埋蔵文化財センター 発掘現場通信 旧練兵場遺跡 (1)
https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/h_tsushin_11kyurenpei_jo01.html
6. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1998 年 旧練兵場遺跡(2)
<http://iseki.lib.kagawa-u.ac.jp/Repository/metadata/148>
7. 善通寺市教育委員会 平成 14 年 善通寺市内遺跡発掘調査事業による埋蔵文化財発掘調査報告書 7 旧練兵場遺跡
8. 香川県教育委員会 2009 年 善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う発掘調査報告書 I 旧練兵場遺跡

2. 善通寺市「旧練兵場遺跡」& 善通寺市街歩き 2013. 1. 27.



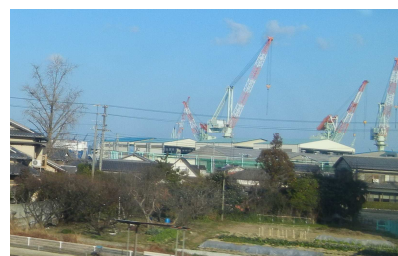
1月27日宿泊地松山を早朝出発して善通寺へ。2時間ほどで善通寺まで行ける。

善通寺にある卑弥呼の時代の四国讃岐の大集落遺跡を見に行くのが目的であるが、もう20年ほど訪ねていない久しぶりの善通寺市を訪ねるのも楽しみ。また、名物の讃岐うどんの食べ歩きも・・・。

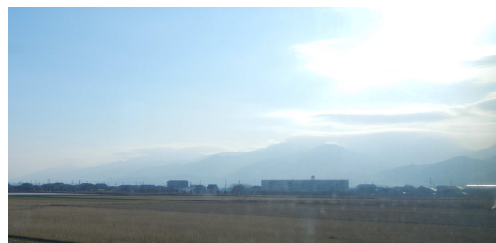
旧善通寺遺跡といっても、市街地の中にある国立善通寺病院が建つ敷地で 外観的には遺跡を示すものは何もないが、どんな場所に建っているのだろうか・・・。

また、この時代に急速に展開して行っただと考えられる実用鉄器化の遺物がみられるかもしれないと。

日曜日の早朝 人影も少ない松山駅で神戸までの乗車券と すぐ乗れる列車 多度津までの特急券を熟年パス「ジパング」で購入。特急も割引で乗れるのはありがたい。 知らなかったのですが、宇和島発のアンパンマン列車特急「しおかぜ」。これはラッキー 孫に写真のいい土産。



久しぶりの電車による予讃線。造船所の建ち並ぶ今治から東予そして新居浜へ。反対側には四国の脊梁 石鎚・赤石山系の山々が朝霞の光の中に輝いて美しい。多度津で土讃線の電車に乗り換えて二つ目が善通寺である。2時間足らずで、多度津到着してホームで土讃線の電車を待つ。



車窓から眺める四国脊梁 赤石山系の山並



多度津駅で

多度津は鉄道と船の交通の要衝で古い町並みが残る街。古い家並みの中にある郷土館で恩師岡田実先生の資料が並べられているのを見て ビックリしたことがある。 街が一変している今 どうなっているのだろうか・・・。

10 分ほどで土讃線琴平の電車で乗り換えるが、シーズンでないので、琴平金比羅さんや善通寺へ向かう参詣の人も少なく、ローカル線はのんびりしたもの。電車はカーブして 讃岐平野の西端の丸亀平野の中を南へ。西側に善通寺のシンボル 善通寺五岳山 独特の形をした小さな山並が平野の中に立っているのが見えてくると、程なく善通寺駅に到着。ここも人影まばら。かつては 混み合っていた印象があるが、静かなもの。でも 駅舎や駅前からまっすぐ西の山裾へと続く大きな街筋には見覚えがある。



善通寺のシンボル「五岳山」 土讃線の車窓より



四国 土讃線 善通寺駅



駅前から西へ伸びる大通り



善通寺駅前 ロータリー

個性的な姿をした善通寺五岳を背に善通寺の町並みが広がっていて、この大通り沿いに善通寺市の市役所・市民会館 四国学院・讃岐宮があり、かつては古い家並みも一部のこっていたが・・・。

そして一番奥に弘法大師ゆかりの善通寺がある。 また、旧練兵場遺跡はこの大通りより、少し右手の奥の山裾にある 国立善通寺病院。 何か ほとんど町並みは変わっていないようだ。

駅にあった善通寺の讃岐うどんマップにも沢山の讃岐うどんの店が記され、この大通りにもいくつか店がある。

まず、讃岐うどんで腹ごしらえして それから街歩きをしようと、大通りを西へ。

市役所の建物のすぐ横にセルフの讃岐うどんの店に入る。

町はひっそりしているのに、うどん屋は人で一杯。さすが、善通寺は讃岐うどんの町でもある。

讃岐うどんの店はもう関西では定番 味もセルフ・食べ方のバリエーションもほとんど変わらないが、なんといったって 易い。 これが、讃岐うどんブーム 多くの観光客をひきつけるのだろう。

市役所のすぐ西のスペースには市民会館があり、ここに 五岳山の西側山に囲まれた有岡地区にある古墳群のひとつから美しい竹割形石棺が展示されていました。



古い酒屋の建物やセルフの讃岐うどんの店がみえる大通り 市役所周辺



善通寺市民会館と展示されていた磨臼山古墳出土の竹割形石棺

こんなに美しい石棺内部装飾が施された石棺が展示。全国的にも珍しい作り付けの石枕とその両脇に浮彫りされた勾玉。4世紀後半の前方後円墳出土の石棺 内部頭部の石枕両耳の位置に勾玉がレリーフされている。国指定重要文化財。磨臼山古墳のある有岡古墳群では古墳時代後期も大型の前方後円墳が造られて、また弥生時代から既に周辺の山から平形銅剣・細形銅剣・中細形銅剣、銅鐸など様々な青銅器が数多く見つかり、この場所が聖地であったとを想像される。

この市民会館の事務所で旧練兵場遺跡の位置と案内板があるかどうかチェックするが、よく判らぬが、おそらく何もないという。「重要な弥生遺跡なのにやっぱり、何もないのか」と。

市民会館の西隣がキリスト教の四国学院のキャンパスで、雑木林の中にチャペル。久し振りに中へ入れてもらう。



四国学院の門と門のすぐそば 雑木林に包まれてチャペル

休日でチャペルは閉まっているが、歩いての散策ならどうぞと、キャンパス内に入れてもらった。



四国学院キャンパス内 芝生広場から 西側 五岳山の山並を眺める

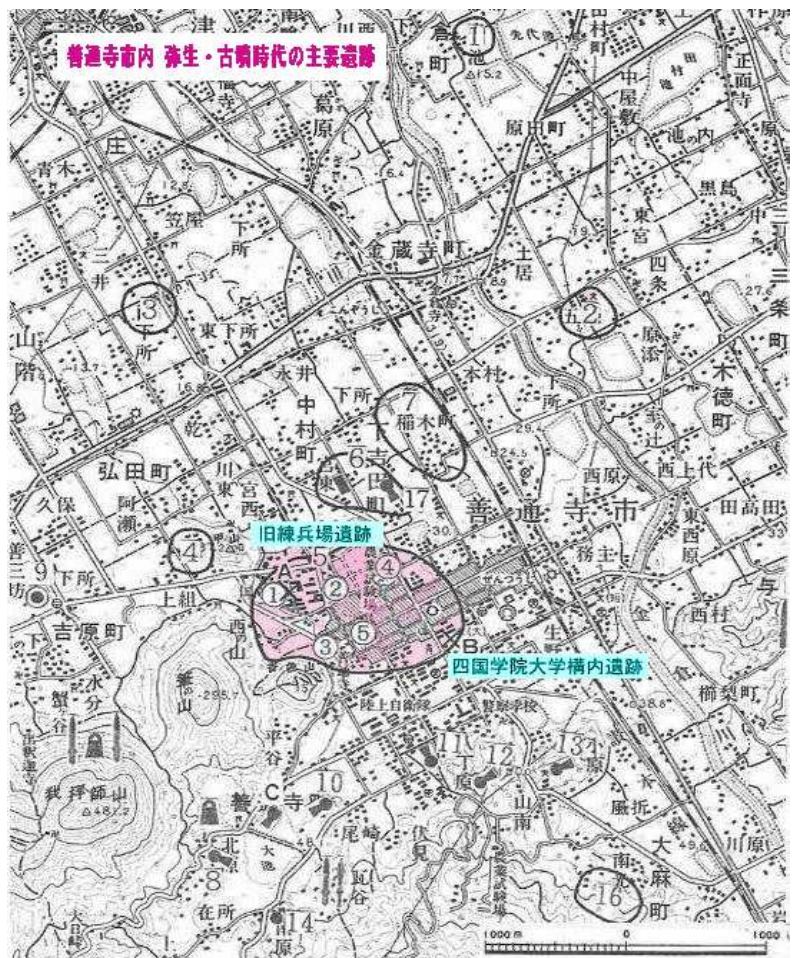
四国学院キャンパス内 芝生広場から西を眺めると五岳山が良く見える。

よく知らなかったのですが、この四国学院のキャンパスは旧練兵場遺跡群の南東端に当たり、このキャンパスや北東側に広がる旧練兵場遺跡（弥生の大集落・遺跡の主要部）やその西にある善通寺伽藍を含め、旧練兵場遺跡群と呼ばれている。

眼前の四国学院キャンパスのグラウンドの右手奥の一部に平成13年にトレンチ2本が掘られ、竪穴住居跡・溝・柱穴などの遺構 須恵器・土師器・鉄製品（鉄釘？ 錆で詳細不明）などの遺物が出土し、6～7世紀の遺構が見つかった。発掘調査はまだ ごく一部であり、弥生の大集落が出土した北西部の遺跡主要部とつながっているとすると遺跡の大きさが良く知れる。

また、旧練兵場遺跡は善通寺の市街地の中に埋まっているが、このキャンパスからは広い芝生広場の向こうに美しい五岳山の山並が眺望され、かつてこの山並を目印にやってきた日本各地の人達交流のイメージがよみがえってくる。建物が建て変わって整備された四国学院のキャンパス。でも 広々として静かな雰囲気がそのまま保たれているのがうれしい。

五岳山の山並を眺めながら、広場を突ききって四国学院の西門へ。



【平成13年度調査】 A：旧練兵場遺跡 B：四国学院大学構内遺跡 C：菊塚古墳
1：中ノ池遺跡 2：五条遺跡 3：三井遺跡 4：甲山北遺跡 5：旧練兵場遺跡群
①彼ノ宗遺跡 ②仙遊遺跡 ③善通寺西遺跡 ④仲村廃寺（伝導寺跡） ⑤善通寺伽藍
6：九頭神遺跡 7：稲木石川遺跡 8：北原古墳 9：青龍古墳 10：王墓山古墳 11：
丸山古墳 12：鶴方峰4号墳 13：磨臼山古墳 14：宮ガ尾古墳 15：野田院古墳 16：
岡古墳群 17：下吉田八幡神社古墳

道を挟んで西側に讃岐宮正面の鳥居前。

鳥居前を讃岐宮に沿って北へ行くとすぐに駅前からの本通との交差点。この交差点を西へ元の本通りを少し歩くと善通寺である。



四国学院キャンパス 西門周辺



西門と道を挟んで西側 讃岐宮



駅前本通りと善通寺町の角

この交差点の向こうに見える本通の北側が善通寺の参道で発展した商店の建ち並ぶ街の中心街善通寺町で、手前南側が文京町。このあたりにも 製麺所のうどん屋があったはずと聞くと高松へ移転したと。

本当にこの界限あまり変わっていないように思うのですが、やっぱりゆったりと時と共に動いているようだ。

また、この交差点の右手町並みの向こう奥が、善通寺町の北隣町の仙遊町なので、そこにある旧練兵場遺跡上に建つ国立善通寺病院が見えるかと思ったのですが、ここからは見えず。

善通寺の街全体が、旧練兵場遺跡群の上に立っている。

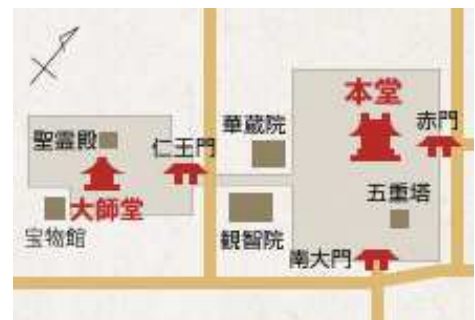
弥生の時代から現代までずっと受け継がれて、これだけ長く人が住み続けてきた場所「善通寺」、気候温暖で四国の交通の要衝 本当に住みやすい場所だったのだと。

本通を山裾へ向かって少し歩くと、右手道の向こうに善通寺の五重塔が眼に飛び込んできて、善通寺の南大門に至る。

空海生誕の寺として、また四国八十八箇所 75 番の札所で いまも参詣の人の波が絶えない。

屏風浦五岳山誕生院と号し、本尊は薬師如来。

真言宗開祖空海の父である佐伯善通を開基として創建され、伽藍は創建地である東院と空海生誕地とされる西院（御誕生院）に分かれている。



善通寺南大門界限



善通寺東院 本堂



五重塔



善通寺東院の後ろから太子堂のある西院へ



西院 仁王門



西院 大師堂

太子堂に行ったときには、寒くはないのですが、みぞれ雪が舞って、それが写真に写りこみました。

善通寺の山側にも裏門があり、そこを出ると五岳山の山裾に大きな駐車場がある。

観光バスの方はこちらから善通寺に入り、街側に人が少ないのも納得だ。(この傍にも讃岐うどん屋が数軒ありました)

善通寺の裏門を出ると小さな流れに石造りの太鼓橋。 この山裾を善通寺の西側を南北に流れる川が弘田川である。

太鼓橋の上から北を見ると大きなコンクリート作りの建物群が家並みの上に見えた。

これが諸施設統合整備中の国立善通寺病院で、この周辺が旧練兵場遺跡である。

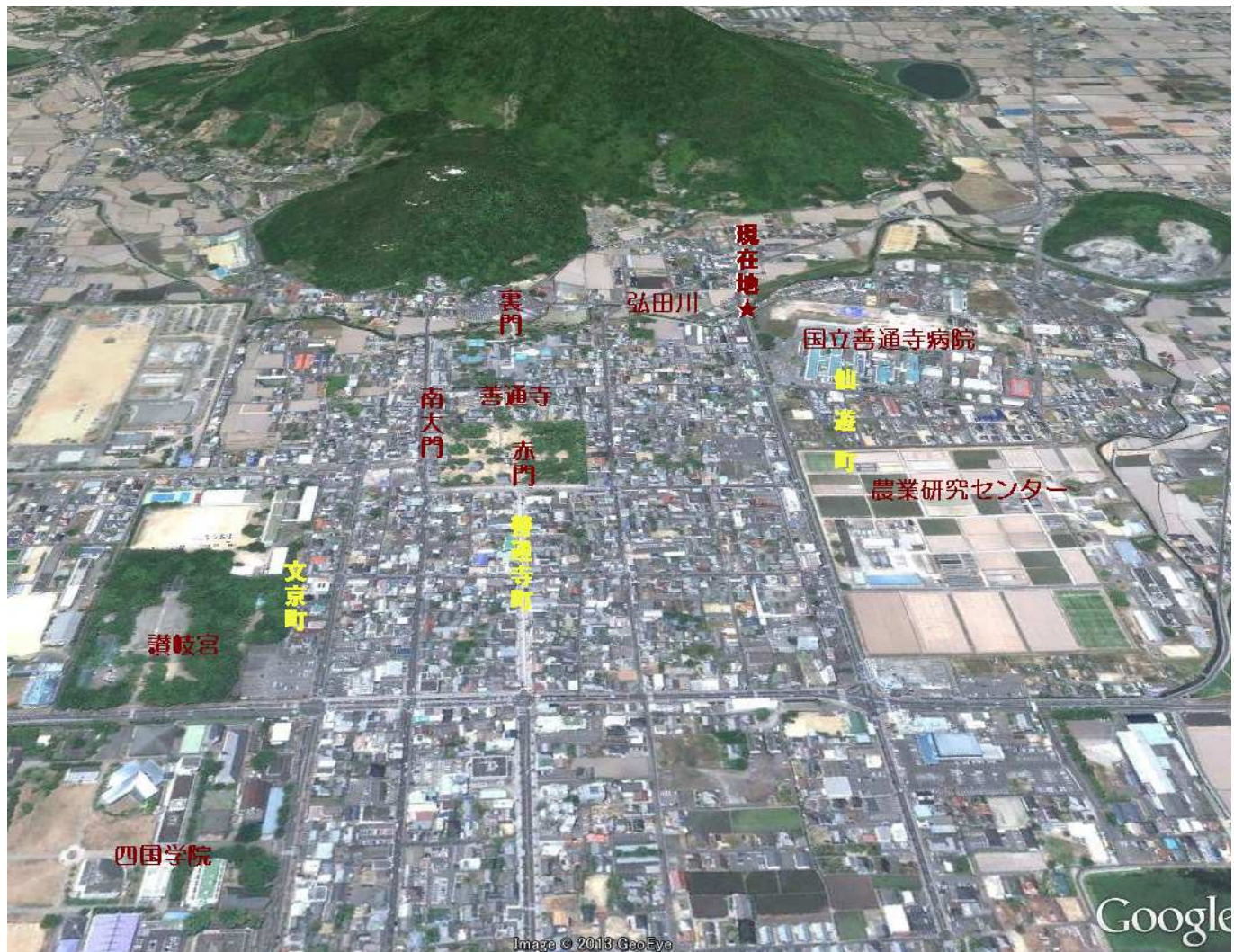


善通寺の裏門 弘田川にかかる石作りの太鼓橋から見る巨大コンクリート建物群
諸施設統合整備中の国立善通寺病院 旧練兵場遺跡

この建物を目印に 弘田川に沿って 田園が点在する中を旧練兵場遺跡へ向かう。



善通寺の裏門から 弘田川に沿って北へ 旧練兵場遺跡へ向かう



善通寺裏門から北へ 国立善通寺病院の南西角 （ 善通寺町と仙遊町を分ける大通りの西の端）

弘田川に沿って 田園が点在する中を北へあるいて、集落の端のところが、建設が進む巨大病院の端で、ここに作業場の入口があり、またこの端のところからまっすぐ西へ大きな通りがあり、この通りに沿って北側に国立善通寺病院・農業センターがあり、ここが旧練兵場遺跡である。



旧練兵場遺跡南西端 病院建設現場

入口のすぐそばに建設事務所が並んでいて、そこで発掘現場が残っているか聞きましたが、もうどこにも残っていないと。

建設中の場所も含め、病院の敷地全体が既に発掘調査され、ここに 500 を超える竪穴住居が出土し、日本各地の人が交流した弥生の大集落が眠っている。

また、この病院の敷地の東側の農業研究センターの広い敷地にも遺跡が広がっていることが確認されているが、本格的な発掘調査はまだ、これからという。

遺跡を思わせるものはこの建築現場では何一つ見られないが、ぐるっとひとまわり病院をする。



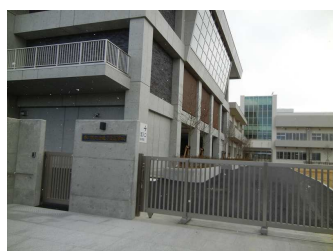
病院の角から東側の道路沿い広い国立善通寺病院の敷地を眺める



国立善通寺病院の南東角歩道橋より、西側 善通寺病院 東側 駐車場の向こうが農業研究センター



国立善通寺病院の南東角歩道橋より、東側の道路を病院の敷地に沿って北へ



国立善通寺病院の北西端から西側道路を南へ

国立善通寺病院の統合整備事業でこの旧練兵場跡地に善通寺病院本院・四国子供医療センター・看護学校・幼稚園・宿舍と住宅などがこの広い敷地全体に建設が進んでいる。本当に広い。

善通寺のシンボル五岳山の山裾の東側に広がる緩やかな傾斜地に弥生の都市機能を備えた大集落があり、日本各地から数多くの人達が交流にやってきた。今と違って この地からは正面奥に讃岐富士がそびえる広大な讃岐平野 左手北西側には瀬戸内海の海が見渡せる。日本各地からやってくる人々は 背後にそびえる五岳山がいい目印だったろう。一体 この地を目指してやってきた人達はこの讃岐に何を求めてやってきたのだろうか・・・

国立善通寺病院の東南角に立って、色々弥生のイメージを膨らめます。

四国ならびに瀬戸内海 東西・南北交流路（和鉄の道）の十字路であることは間違いないだろうが、

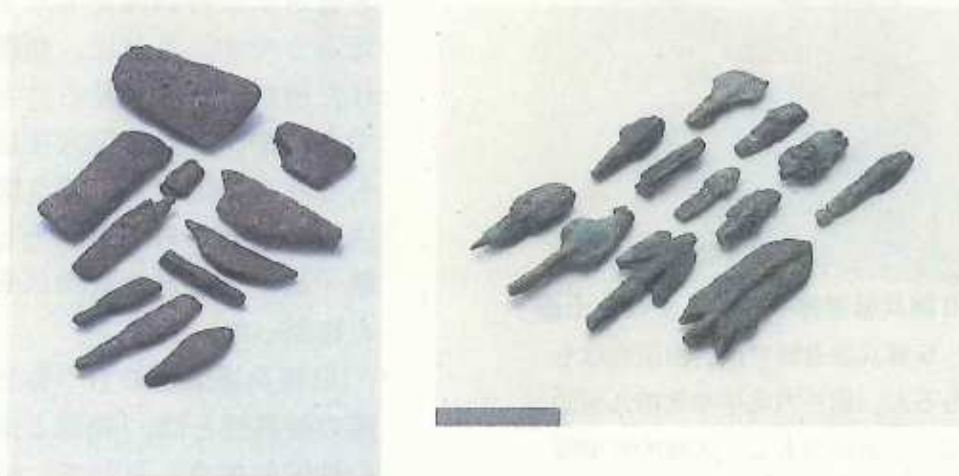
それだけだったのだろうか??? 何を求めて讃岐の地へやってきたのか? また、讃岐は何をもとめていたのか?
資料によるとこの大集落の一角にも鍛冶工房と見られる住居があり、数々の鉄・銅製品が出土しているという。
この時代大陸の鉄がまた重要な交易品 すぐ南には海の神金比羅宮もある。
この地が大陸の鉄の集散地であったのか・・・・。

1. 人は動く

倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使訳通ずるところ三十國。

『三国志』魏書東夷伝倭人条

鉄・銅・石・玉・朱・塩…を求めて

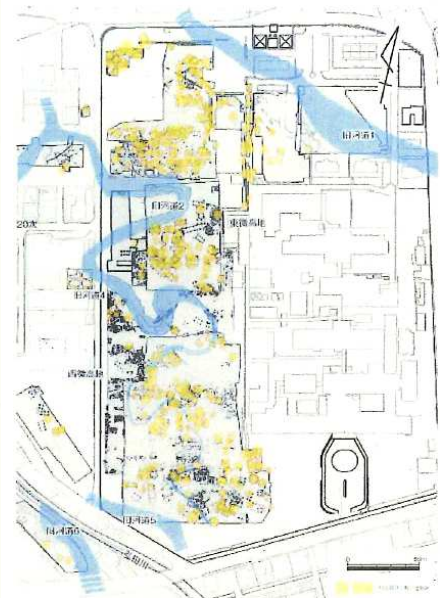


旧練兵場遺跡より出土した鉄製品（左）と銅鏃（右）

こうした金属製品の原料は、中国や朝鮮半島から製品などとして遺跡に持ち込まれたようだ。それを遺跡内で、再加工などして、別の製品に作りかえられることもあった。



旧練兵場遺跡よりみつかった鍛冶炉のある竪穴住居
中央の黒く見えるところが鍛冶炉。
遺跡内で鉄製品の加工がなされたことが実証された。



旧練兵場遺跡の弥生時代の竪穴住居の分布

香川県埋蔵文化財センター考古学講座 12「瀬戸内をゆきかう人々」2011. 7. より

<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/kankobutsu/koukogakukouza12.pdf>

また、弥生の終末期 卑弥呼の時代 この地が都市機能を備えた大集落で「国」だとすると、やっぱり「首長」がいただろう。 集落と共に重要である墓地はどこにあったのか・・・この旧練兵場遺跡の遺物も見たい。

坂出市の金山の南側にある香川県埋蔵文化財センターを帰りに訪れねばと思っていたのですが、すぐ近くの善通寺赤門通りに善通寺市郷土館があるのを知って、立寄ってビックリ。

小さな博物館ですが、善通寺市の縄文から古墳時代にかけての遺跡の情報や出土遺物がパネル展示でよく整理されていて、旧練兵場遺跡の展示もありました。



善通寺から東へ伸びる参道 赤門通りにある善通寺市郷土館

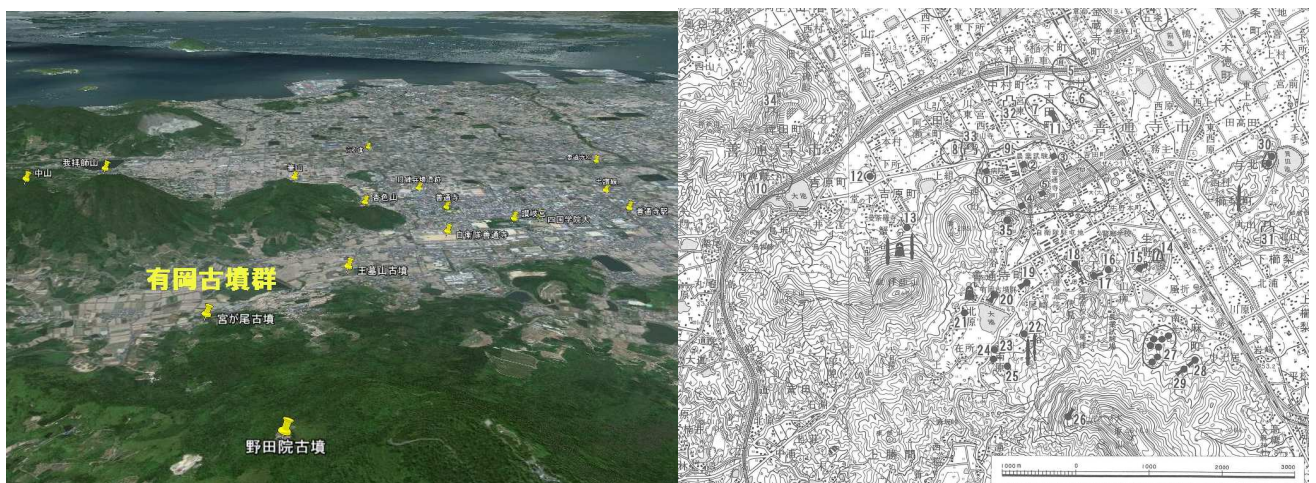


国指定史跡有岡古墳群出土品を中心に、考古・歴史・民俗資料約 1,000 点を展示

主な展示は五岳山の南山麓 弘田川が山間を東へ流れ出る有岡地区大麻山山麓に点在する王墓山古墳、宮が尾古墳、野田院古墳などの有岡古墳群。 6 基の古墳が国の史跡に指定され、王墓山古墳、宮が尾古墳、野田院古墳は史跡公園として整備され、野田院古墳の展望台からは岡山から愛媛まで一望できると聞く。

この地には、3 世紀末から 7 世紀にかけて、数多くの古墳（有岡古墳群）が築かれ、周囲の山からは古墳時代以前の銅鐸・銅剣などが出土し、この地が善通寺を治める首長たちの整地であったことが知れるという。

其の中にある野田院古墳は発生期の古墳群の特徴を有する 3 世紀後半の古墳群 卑弥呼の時代 大和と密接な関係のあった首長がこの善通寺にいたことがわかる



3 世紀末から 7 世紀にかけて 善通寺の首長たちが眠る有岡古墳群



のたのいんこふん 野田院古墳

野田院古墳は大麻山北西麓のテラス状平坦部(標高405m)に所在する丸亀平野で最古式の前方後円墳です。

その規模は全長44.5m、後円部径21m、後円部の高さ2m、前方部幅6~13mで、前方部は盛り土、後円部は安山岩塊を積みあげて築いた積石



墳丘実測図



整備前の野田院古墳

の古墳です。また、前方部はくびれ部が細く締め先端が撥形に開く発生期の前方後円墳の特徴を示していることや出土遺物などから、3世紀後半に構築されたと考えられています。

市内には外にも、大窪経塚・大麻山経塚・大麻山椀貸塚・丸山1・2号墳などの積石塚があります。積石塚は、坂出・綾歌の積石塚を経て高松の石清尾山古墳群までの範囲に濃密に分布しています。積石塚古墳の発生と変遷を研究し、讃岐の古墳時代前期の地域集団関係を知る上で非常に貴重な遺跡です。



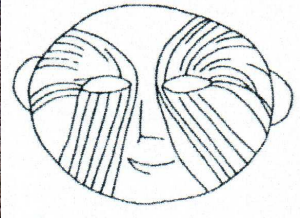
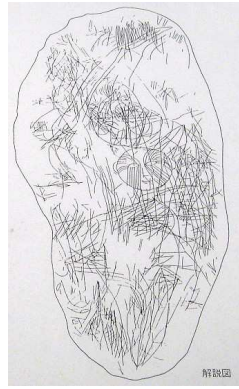
整備後の野田院古墳

善通寺市郷土館資料「有岡古墳群」より

展示を見せていただきながら、善通寺の地について色々教えていただきました。

有岡古墳群のほか、私が気になったのは旧練兵場遺跡群の仙遊遺跡から発見された弥生時代後期の箱式石棺の蓋石に線刻で描かれた刺青が入った顔(鯨面)の展示。

「魏志倭人伝」における倭人の記述を彷彿させる資料です。



旧練兵場遺跡群 仙遊遺跡出土 弥生時代後期の箱式石棺の蓋石に線刻で描かれた刺青が入った顔（鯨面）

この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面、や鳥の絵の他、
直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

有岡古墳群を見に出かけたかったのですが、「野田院古墳」を見に行くにはちょっと時間的に無理。もう一度また善通寺に来ようと。すっかり話し込んで、遅くなって、坂出に出かける時間がなくなった。
ぶらぶら 善通寺の街歩きを楽しんで、善通寺の自衛隊などを見て、善通寺駅へ。



善通寺は四国の重要な自衛隊駐屯地



市役所敷地内南側にある旧偕行社 旧陸軍の社交場

一日久し振りの善通寺の街歩き。

気になっていた旧練兵場遺跡にも行って スケールの大きな弥生遺跡を実感。

初期大和王権に大きな役割を果たしてゆく讃岐の位置付け・役割がイメージが出来ました。

でも この重要な遺跡の姿を見ることが出来ないのは残念。

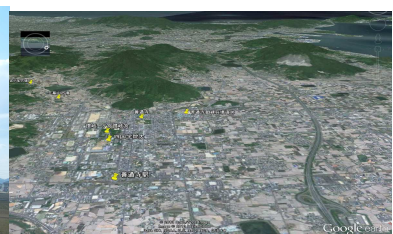
何とかこの遺跡を前に五岳山そして広大な讃岐平野を見渡す広場が整備されないものか・・・と。

讃岐うどんもはしごして 気楽な楽しい久し振りの善通寺街歩きでした。



2013.1.27. タ 四国から岡山へ 夕暮れの備讃瀬戸を眺めながら

Mutsu Nakanishi



参考 1 四国讃岐平野の中心地 善通寺市旧練兵場遺跡群

インターネット検索ファイルより

◎ 香川県埋蔵文化財センター香川の弥生時代研究最前線—旧練兵場遺跡の調査から

http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/yayoi/jidaikenkyusaizensen_kohen.html



写真は <http://www.city.zentsuji.kagawa.jp/digi-m/culture/detail/080/index.html> より

旧練兵場遺跡群は善通寺市仙遊町に所在し、現在の国立病院機構善通寺病院・農業試験場を中心に広がる東西約1km、南北約0.5kmの縄文時代後期から中世にかけての大集落遺跡。以前は旧練兵場遺跡、善通寺西遺跡、仙遊遺跡、彼ノ宗遺跡、中村廃寺など別個の遺跡名で呼ばれていましたが、現在では同一の遺跡と認識されています。

発掘調査により、150棟以上の竪穴式住居跡や50棟以上の掘立柱建物跡、土器棺、鎌倉時代の条里制の基準線となる溝などの遺構や、銅鐸、青銅製のやじり、大量の玉類、丹塗土器や絵画土器など、多種多様な遺物が見つかった。

旧練兵場遺跡は鏡や玉などの貴重品や交易品、幾重にも重複する住居跡などをご紹介してきましたが、人口・物資・

情報が集中し、長期にわたる集落の営みが続く「都会」的な集落の姿が明らかになりつつあります。

それでは「都会」を支えたものは何だったのでしょうか？

旧練兵場遺跡を中心とする半径10kmの地域には、同時期の小規模な遺跡が分布します。海浜の遺跡や山林の遺跡、河川沿いの遺跡など、立地条件は様々です。

旧練兵場遺跡で出土した建築材、鯛やイノシシの骨、多量のドングリなどは、これらの周辺の遺跡との日常的な交換を物語ります。

それだけでなく、「平形銅剣（ひらがたどうけん）」という瀬戸内地方に特徴的な器財がこの地域で多数出土していることから、青銅器を用いた非日常的な祭祀の伝統も共有していたと考えられます。



つまり、これらの遺跡は日常、非日常ともに緊密な関係を維持した地域社会を形成していたのです。九州や近畿など遠方との交易を活発に行い、多数の人々が集まって生活する「都会」を支えたのは、生活、交通、政治などに関わる地域社会が存在したからなのでしょう。

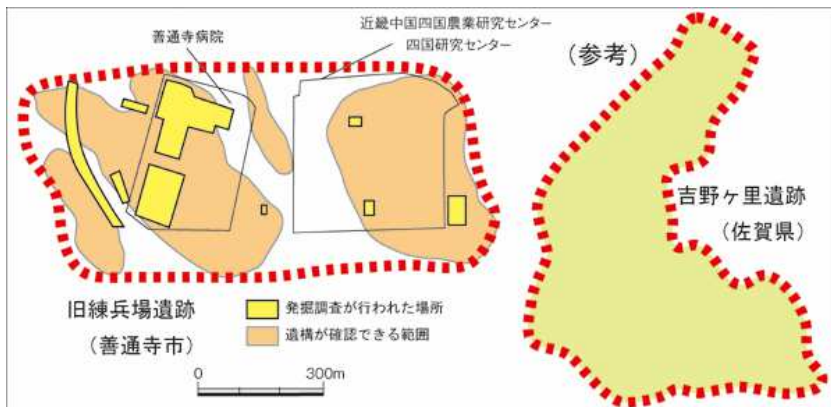
1. 旧練兵場遺跡の特徴

吉野ヶ里（よしのがり）遺跡（佐賀県）を訪れると、東京ドームの約 10 倍もある遺跡の広さに誰もが驚き、2,000 年前の「クニ」の姿に思いを馳せます。

香川には、これほどの遺跡はないと思われる方が多いかもしれませんが、実は普通寺（ぜんつうじ）市街地の地下に大遺跡があるのです。現在、香川県埋蔵文化財センターが発掘中の旧練兵場（きゅうれんぺいじょう）遺跡は、吉野ヶ里遺跡とほぼ同じ、50 ヘクタールの大集落跡なのです。

約 500 年間、何世代もの人々が繰り返し建てた住居や倉庫の跡が同じ場所に幾重にも重なり、今もなお新発見が続いています。

そして驚くべきことに、青銅器や勾玉（まがたま）など、普通の集落跡ではめったに出土しない貴重品が続々と出土しています。たとえば、青銅製の鍬（やじり）は、県内出土品の 9 割以上に当たる約 50 本がこの遺跡で出土しています。大集落跡が継続して営まれることと、貴重品が多数出土することの 2 点が旧練兵場遺跡の最大の特徴です。この特徴は、果たして何を意味するのでしょうか。これから弥生大集落跡の謎解きをお届けします。



旧練兵場遺跡と吉野ヶ里遺跡の範囲

2 銅鐸と鏡

旧練兵場遺跡からは青銅器が多く出土している。

代表的な青銅器は銅鐸（どうたく）と鏡であるが、両者の役割は明確に異なる。この違いが示す歴史的な背景について考えてみよう。

最初に現れる青銅器は銅鐸である。

弥生時代の中ごろ（約 2100 年前）を中心に、集団の祭器として使用された。銅鐸に変わって現れるのは鏡である。

鏡は有力者の権威を示す道具であり、特定の個人が所有し政治的な色彩が濃いものである。鏡には中国からの輸入品と国産の鏡があり、弥生時代の終わりごろ（約 1800 年前）を中心に出土している。

この集団の祭器の銅鐸から有力者の権威を示す鏡への青銅器の交代は、弥生時代終わりごろにかけて旧練兵場遺跡が大規模集落へと成熟していく過程において、集団のとりまとめを行う有力者が現れたことを示している。また、鏡は集落内の 3 か所より出土していることから、複数の有力者によって集落が経営されていたと考えられる。



旧練兵場遺跡から出土した銅鐸片と鏡片

このように青銅器を通して、一つの集落において日本列島全体に通じる弥生時代の社会変化を捉えることができる点は、旧練兵場遺跡の最大の特質である。

3. 玉

旧練兵場遺跡の遺物の中に玉がある。

勾玉（まがたま）、管玉（くだたま）、小玉などの種類があり、材料には硬玉（ヒスイ）、碧玉（不純物を含んだ石英）、水晶、ガラスなどが使われている。県内の同時期の遺跡と比較してみると、調査面積あたりの出土量が突出して多く、本遺跡の特色のひとつに挙げることができる。

県内では産出しない材料を使用していることや、遺跡内から製作道具が出土していないことから、県外から持ち込まれた可能性が高い。

他地域で作られた土器の出土例が多いことと合わせて、他地域との交流が積極的に行われた結果を反映している。

また、玉は、本遺跡の弥生時代後期から終末にかけての竪穴住居跡で出土することがわかってきた。さらに、これらの住居跡は遺跡の西半部分にいくつかのまとまりをもって分布する傾向がみられることも明らかになってきた。

同様の例は県内の他遺跡ではほとんど知られておらず、本遺跡の特徴を物語るものである。

このことは、本来、装身具や威儀具（いぎぐ）であった玉が、住居の廃絶に際して埋納する祭具として使用されたことを示すだけでなく、そのような共通の祭祀を有する集団が遺跡内に複数存在したことを示唆するものとして評価できる。



左から管玉、勾玉、ガラス小玉

4. 竪穴住居跡と高床倉庫跡

旧練兵場遺跡の主な遺構には、竪穴住居跡と高床倉庫跡があります。

遺跡が継続する約 500 年の間、竪穴住居跡の検出数は増加し、人口が増えていたことが分かります。一方、これまで調査した範囲では、弥生時代後期後半（約 1,900 年前）以後の高床倉庫跡は検出されていません。

後期後半以前、遺跡内の各丘では、高床倉庫を建て物資を蓄えていました。

ところが、女王卑弥呼（ひみこ）が活躍した弥生時代終末期（約 1,800 年前）になると、有力者が物資の管理を行う社会に変化し、どこにでも高床倉庫を建てるのが許されなくなった可能性があります。



それぞれの丘に並ぶ住居と倉庫（遺跡の景観復元 越智広二さん作）

「魏志倭人伝（ぎしわじんでん）」は、当時の

西日本各地が有力者を中心としたクニ社会へ移行しつつある姿を伝えており、旧練兵場遺跡を中心とするこの地域も、政治的統治が始まったと考えられます。 そのような有力者が旧練兵場遺跡に住んでいたのであれば、まだ調査が行われていない範囲には、有力者の住居跡や象徴的な建物跡が眠っているかもしれません。

5. 弥生土器

旧練兵場遺跡の整理作業で毎日土器と顔をつき合わせていると、讃岐の弥生土器の中に見慣れない土器が混じることが分かってきた。それは器形と胎土（たいど）が異なる（他地域産の土器が持ち込まれた）ものと、器形は異なるが胎土は讃岐の土器と同じ（讃岐の土で他地域の土器の形を作った）ものの 2 タイプに分けられる。

これらの土器は九州東北部から近畿にかけての瀬戸内海沿岸の各地域で見られる器形をしており、弥生時代後期前半（約 1,900 年前）を中心とした時期に盛んに見られることがわかってきた。

土器は自分で動くことはできない。

土器そのものや内容物の入れ物として人が持ち運んだり、人が移住してきて讃岐の土で故郷の土器の形を再現したりという、人の動きに伴って旧練兵場遺跡にもたらされたのである。

すなわち、各地域の人たちが地域社会という枠を超えて活発に交流をした証であり、それは瀬戸内海沿岸を中心とした広い範囲に及ぶことが明らかになったのである。

県内の同時代の遺跡と比較してこれらがたくさん出土する**旧練兵場遺跡**というのは、**讃岐における物・人の広域な交流の拠点となった集落**であり、土器という一面を取り上げてみても、讃岐の弥生時代を語る上で看過できない内容を持った大遺跡であると改めて認識させられる。



福岡県付近から運ばれてきたと思われる弥生土器

6 鉄器

弥生時代中期後半（約 2,000 年前）に、列島で鉄器の生産が開始され、旧石器時代から使用された石器は次第に鉄器に交代していく。旧練兵場遺跡においても弥生時代後期（約 1,900 年前）の鍛冶炉（かじろ）が見つかり、生産された鏃（やじり）・斧（おの）・万能ナイフである刀子（とうす）が多量に出土した。

鉄器の生産には、鍛冶炉の 1,000℃を超える温度管理など操業のための専門的な技術の獲得や、主に朝鮮半島から鉄素材の入手など遠距離交易・交流が必要となるため、旧練兵場遺跡のような拠点的な集落を中心に鉄器生産が行われた。また、遠距離交易・交流は、朝鮮半島との窓口となる北部九州地域を相手として行われたと考えられ、それを統括・調整する有力者も存在していたと見られる。旧練兵場遺跡の有力者は、鉄に関係した交易・交流と同時に、鏡などの権威を示す器物や思想を獲得することにより、政治権力を発達させたと考えられる。



鉄の鏃（長さ 5cm）



弥生時代の鍛冶作業風景（樽谷京子さん作）

7 地域社会

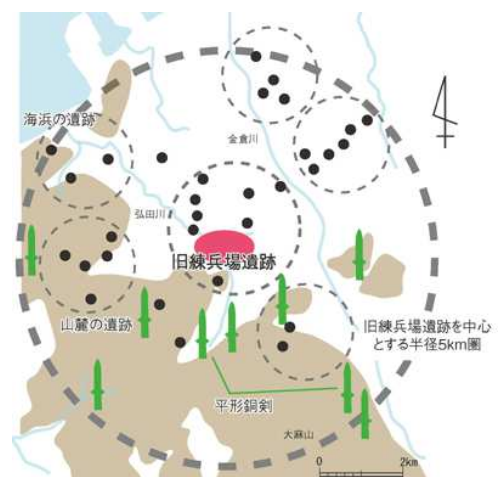
鏡や玉などの貴重品や交易品、幾重にも重複する住居跡などをご紹介します。人口・物資・情報が集中し、長期にわたる集落の営みが続く「都会」的な集落の姿が明らかになりつつあります。

それでは「都会」を支えたものは何だったのでしょうか？

旧練兵場遺跡を中心とする半径 10km の地域には、同時期の小規模な遺跡が分布します。海浜の遺跡や山林の遺跡、河川沿いの遺跡など、立地条件は様々です。

旧練兵場遺跡で出土した建築材、鯛やイノシシの骨、多量のドングリなどは、これらの周辺の遺跡との日常的な交換を物語ります。

それだけでなく、「平形銅剣（ひらがたどうけん）」という瀬戸内地方に特徴的な器財がこの地域で多数出土していることから、青銅器を用いた



旧練兵場遺跡と周辺の遺跡

非日常的な祭祀の伝統も共有していたと考えられます。

つまり、これらの遺跡は日常、非日常ともに緊密な関係を維持した地域社会を形成していたのです。

九州や近畿など遠方との交易を活発に行い、多数の人々が集まって生活する「都会」を支えたのは、生活、交通、政治などに関わる地域社会が存在したからなのでしょう。

8 ベンガラと朱

「赤」は太陽や炎などを連想させ強い生命力を象徴する色、あるいは特別なパワーが宿る色と信じられ魔除けとしても使われました。旧練兵場遺跡の弥生時代終末期（約 1800 年前）の土器には赤い顔料が付いたものがあります。

分析の結果、ベンガラ（酸化鉄が主原料）と朱（硫化水銀が主原料）の 2 つがあることがわかりました。

前者は吉備地方から持ち込まれた高杯などに装飾として塗られています。

赤い土器は日常雑器ではないことを主張し、赤の持つ力で神秘性を際立たせているようです。

後者は把手付広片口皿の内面に付いた状態を確認しました。

把手付広片口皿とは、石杵や石臼ですりつぶして辰砂を液状に溶いたものを受ける器であり、旧練兵場遺跡で朱を使用したことを裏付けます。

朱は同時代の巨大な墳丘墓である楯築（たてつき）遺跡（岡山県倉敷市）の埋葬施設へ大量に納められるなど、葬送儀礼にも用いられています。

辰砂の産地は阿讃山脈を越えた若杉山（わかすぎやま）遺跡（徳島県阿南市）が一大採掘地として挙げられます。

瀬戸内海が人や物の行き交う文化の大動脈であったことは知られていますが、それにクロスするような徳島—香川—岡山という「赤」でつながる文化の道も存在したことが浮かび上がってきたのです。



旧練兵場遺跡出土の片口皿



片口皿に付着している朱

9 旧練兵場遺跡の研究

これまで紹介してきたように、当時の人々は、他の地域や周辺集落から交易によって入手したり、旧練兵場遺跡で生産された銅・鉄製品などの貴重品や土器や石器などの日用品を求めて旧練兵場遺跡に集まった。

まさに豊富な品々が取り揃えられた巨大市場であり、集落ではなく「都市」的な様相を呈していたのであろう。

それでは、旧練兵場遺跡に一極集中する流通に傾斜した香川の弥生時代社会とはどのような経済であったのか。

「都市」的な大集落を構成する多くの人々はどのように編成されていたのかなど、当時の人間社会の出来事を具体的に復元する必要がある。

我々は土器や竪穴住居跡などのハードウェアは発掘調査で確認できるが、思想や宗教など社会組織を構成するソフトウェアは直接見ることができない。当時の人間社会の出来事を復元するためには、ソフトウェアの復元が不可欠であり、そのためには、出土した遺構遺物を細かく検討し、それらが旧練兵場遺跡の内部や当時の社会の中でどのような位置を示すのか体系づけて全体像を



旧練兵場遺跡に集中して出土する銅鉄

復元する必要がある。旧練兵場遺跡の集落の研究は、まさに当時の弥生時代社会を研究することと言える。

◎ 歴歩 香川県善通寺市・旧練兵場遺跡 H22.8

歴歩 歴史は歩く。ゆっくりと歩く。それを追いかける。

<http://blog.goo.ne.jp/thetaoh/e/fab21bae4e8f342e2b63bf5eef82865f>

<<旧練兵場遺跡の主な特徴と出土品まとめ>>

香川県埋蔵文化財センターのホームページから旧練兵場遺跡の主な特徴と出土品などを項目的にまとめてみると、

- ① 東西1 km、南北約0.5 kmの約50万㎡の大きな面積を持つ遺跡。
- ② 弥生時代から鎌倉時代に至る長期間継続した集落遺跡。弥生時代には500棟を超える住居跡がある。
2008年の7月には弥生時代の生活面を構成する土の中から、縄文時代後晩期の浅鉢とみられる土器が出土
- ③ 銅鐸・銅鏃などの青銅器や勾玉など、普通の集落跡ではめったに出土しない貴重品が出土している。
青銅製の鏃は、県内出土の9割以上に当たる約50本が出土している。
- ④ 弥生時代後期（約1,900年前）の鍛冶炉が見つかり、生産された鏃・斧・刀子が多量に出土している。
主に朝鮮半島から鉄素材の入手など遠距離交易・交流が必要となるため、本遺跡のような拠点集落を中心に鉄器生産が行われたとしている。
- ⑤ 讃岐の弥生土器の中に見慣れない土器が混じり、他地域産の土器が持ち込まれたものと、讃岐の土で他地域の土器の形を作ったものがある。これらの土器は九州東北部から近畿にかけての瀬戸内海沿岸の各地域で見られる器形をしている。弥生時代後期前半（約1,900年前）を中心とした時期に盛んに見られる。讃岐における物・人の広域な交流の拠点となった集落であることを示している。
- ⑥ 把手付広片口皿の内面に朱が付いた状態を確認している。辰砂を石杵や石臼で摺りつぶして液状に溶いたものを受け器で、本遺跡で朱を使用したことを裏付ける。
辰砂の産地は阿讃山脈を越えた若杉山遺跡（徳島県阿南市）が一大採掘地として挙げられ、同時代の巨大な墳墓である楯築（たてつき）遺跡（倉敷市）などへの埋葬にも用いられたと推測でき、徳島—香川—岡山という「朱」でつながるルートの存在が浮かび上がって来る。
- ⑦ 硬玉、碧玉、水晶、ガラス製などの勾玉、管玉、小玉などの玉類が多量に出土している。
県内では産出しない材料を使用していることや、遺跡内から製作道具が出土していないことから、県外から持ち込まれた可能性が高いとし、他地域との交流が積極的に行われた結果を反映している。
特に、弥生時代後期から終末にかけての竪穴住居跡で出土している。
また、本来、装身具や威儀具であった玉であるが、特定な出土分布傾向を示し、共通の祭祀を有する集団が遺跡内に複数存在したことを示唆している。
- ⑧ 主な遺構には、竪穴住居跡と高床倉庫跡がある。
遺跡が継続する約500年の間、竪穴住居跡の検出数は増加し、人口が増えていたことが分かる。
一方、これまで調査では、弥生時代後期後半（約1,900年前）以前には、遺跡内の各丘で高床倉庫を建て物資を蓄えていたとみられるが、以後になると高床倉庫跡は検出されていない。
女王卑弥呼が活躍した弥生時代終末期（約1,800年前）になると、有力者が物資の管理を行う社会に変化し、どこにでも高床倉庫を建てるのが許されなくなった可能性があるとし、当時の西日本各地が有力者を中心としたクニ社会へ移行しつつある姿を伝えているとみられるとしている。

【インターネットから採取 取りまとめ資料】

1. 香川県埋蔵文化財センター香川の弥生時代研究最前線—旧練兵場遺跡の調査から
http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/yayoi_jidaikenkyusaizensen_kohen.html
2. 歴歩 香川県善通寺市・旧練兵場遺跡 H22.8
<http://blog.goo.ne.jp/thetaoh/e/fab21bae4e8f342e2b63bf5eef82865f>

参考2. 卑弥呼 邪馬台国の候補地 吉野ヶ里に匹敵する四国讃岐の大集落 2013.1.27.
日本各地の人が交流した大都市集落 善通寺市「旧練兵場遺跡」を訪ねる

香川県埋蔵文化財センター考古学講座12「瀬戸内をゆきかう人々」2011.7. より
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/kankobutsu/koukogakukouza12.pdf>



瀬戸内を行き交う人々

香川県埋蔵文化財センター 考古学講座 12
2011年7月3日 蔵本 晋司

約2,000年前の弥生時代後期、倭人社会は大移動の時代を迎えていました。それに伴い、多くのモノが持ち運ばれ、遺跡に残されました。まもなく、前方後円墳という特異な形の墓が、列島の大半の地域に造られるようになります。おそらく、こうした弥生時代の人々の広域的な交流を背景として、古墳は成立したものと考えられます。

本講座では、古墳の成立への歩みを、古墳そのものではなく、弥生社会のなかから、人々の交流・交易をキーワードに、考えてみたいと思います。

1. 人は動く

倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使訳通ずるところ三十國。

『三国志』魏書東夷伝倭人条

鉄・銅・石・玉・朱・塩…を求めて



旧練兵場遺跡より出土した鉄製品（左）と銅鏃（右）

こうした金属製品の原料は、中国や朝鮮半島から製品などとして遺跡に持ち込まれたようだ。それを遺跡内で、再加工などして、別の製品に作りかえられることもあった。

2. 旧練兵場遺跡

旧練兵場遺跡は、国立善通寺病院敷地を中心に、東西1km、南北500m程度の範囲に広がる集落遺跡です。弥生時代の中頃（約2,100年前）に集落が営まれはじめ、室町時代まで継続した遺跡であることが、これまでの発掘調査で明らかとなりました。とくに弥生時代後期（約1,900～1,800年前）には、多数の竪穴住居が発掘され、香川県下でも最大規模の集落遺跡であることが明らかになりました。



旧練兵場遺跡よりみつかった鍛冶炉のある竪穴住居

中央の黒く見えるところが鍛冶炉。遺跡内で鉄製品の加工がなされたことが実証された。



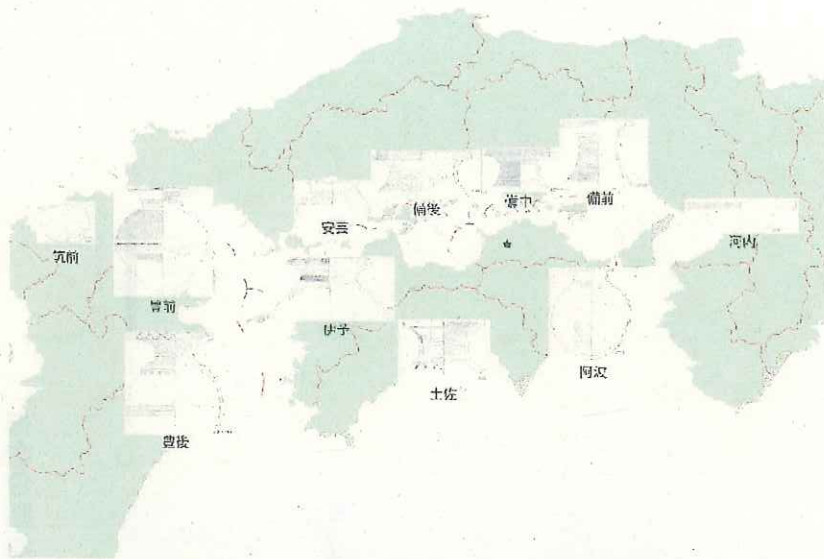
旧練兵場遺跡へ持ち込まれた土器

旧練兵場遺跡では、四国内はもちろん、瀬戸内北岸や北部九州地域の土器が出土し、広域的な地域と交流・交易がおこなわれていたことがわかりました。

その特異性とは何か？

旧練兵場遺跡は、単に集落の規模が大きいというだけではなく、他の集落にはない、さまざまな特異性をもっていたようです。それは、発掘された遺構や遺物に見ることができます。多数の竪穴住居はもちろん、鍛冶炉を伴う竪穴住居や遺跡から多数出土した鉄・銅・玉などの遺物がそれを物語っています。

旧練兵場遺跡のもつ弥生集落の特異性とは、「物流と情報の地域的拠点」として、位置付けることができるものだと考えられます。



旧練兵場遺跡より出土した各地の土器

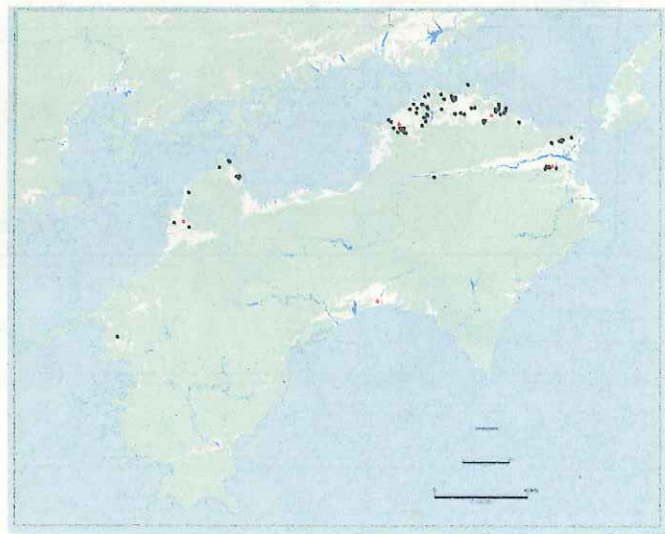
旧練兵場遺跡からは、主に瀬戸内沿岸部地域の土器が大量に出土している。旧練兵場遺跡の人々は、瀬戸内海を舞台とした、南北・東西の交流の一端に連なっていたのであろう。

3. 古墳出現へむけて

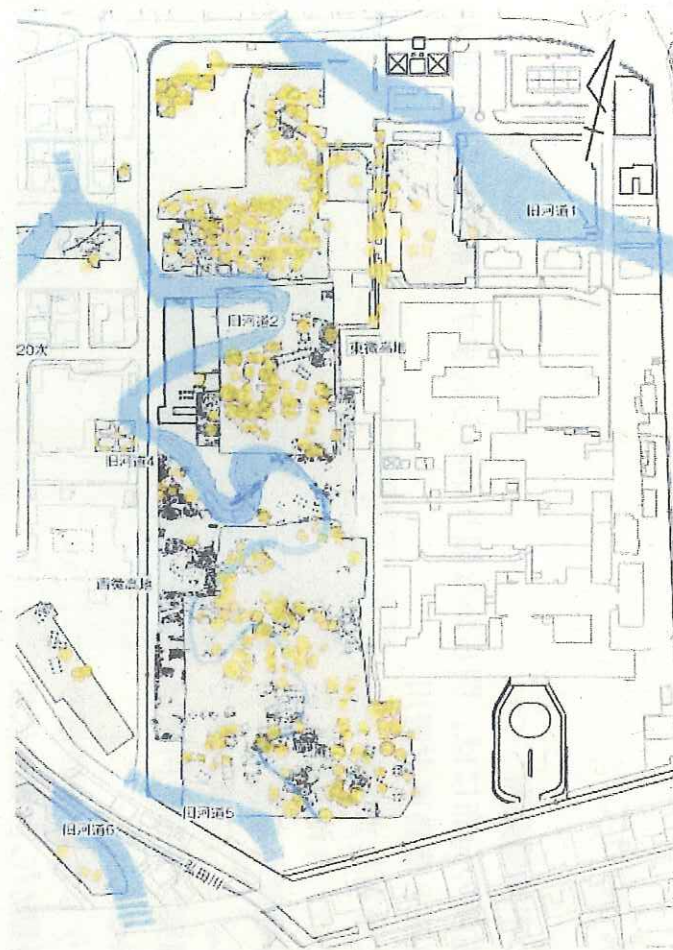
前方後円墳の不均等分布

四国の前期古墳の分布には、明らかな偏りがみられます。前方後円墳に限れば、香川県の東部と徳島県吉野川下流域に濃密に分布しますが、それ以外の地域では、今治平野を除いて、1～3基程度が点在しているに過ぎません。とくに高知県では、現在まで確実な前方後円墳は確認されていません。

おそらくこうした分布の偏りは、弥生時代後期から古墳時代前期初めにかけての集落遺跡の動向と、密接にかかわりをもっていた可能性が考えられます。



四国の前期前方後円墳と拠点集落の分布



旧練兵場遺跡（左）と川津中塚遺跡（右）の弥生時代の竪穴住居の分布

遺跡の継続期間が異なるため直接比較することはできないが、両遺跡では明瞭に竪穴住居の分布に違いが認められ、居住人口の多寡を反映している可能性が考えられる。また、こうした遺跡の継続期間の長短も、拠点的性格をもった遺跡の特徴でもある。